

—海外で活躍する獣医師 (X)—

海外で獣医師として活動して

蔵田 團果<sup>†</sup> (国際協力機構ザンビア家畜衛生・生産技術普及向上計画専門家)



新聞記者や雑誌記者で、様々な分野の記事を書き上げる人達のことを雑記者と言うようであるが、これをあてはめると私の場合、「雑獣医師」と言うことになる。専門は何かと聞かれれば「黒毛和種(和牛)の改良繁殖」と答えることが多いが、これは単に携わった

期間からの答えであり実態は種々の雑獣医師業務に従事してきた。

1 獣医師への道程

今思えば、獣医師への道程を辿り始めたのは、昭和40年代前半に遡る。その頃の東京の自宅周辺には、まだ小川や雑木林が残っており、夏休みともなれば、歳の離れた兄と早朝からカブトムシ採りに出かけたり、セミ採りやザリガニ釣りに熱中。生き物に関する興味は飽きることなく、ドブネズミは泳げると信じていた残酷な子供は、何とドブネズミの子供の捕獲に成功、水を張ったバケツで実験を始めることとなるが、哀れ子ネズミはその数分後に溺死させられる運命。残酷な子供は結果を親に報告するも、単に呆れ返られるだけと相成った。

様々な挑戦はその後も続き、よく縁日等で売られていた緑色やらピンク色やらのヒヨコ、このヒヨコ達は弱くて育たないとされていた(今思えば当然のこと雌雄鑑別の後淘汰されるべき雛を染料に漬けるわけであるから)。これを僅かな小遣いで買ってきて育て始めるが、大方の予想に反して鶏まで育ってしまう。我が家は、一応住宅地と言われる一画にあったため、近所のことを意識した父が、彼の職場である小学校へ運び去る。しかしながら、また新たな色付きヒヨコが仕入れられることとなる。このイタチごっこは、数回繰り返された。勿論犬猫を飼うことに関しては一大ミッションであり、よく捨て犬や捨て猫を拾ってきたりしたが、自分の娘を良く心得る親は、なかなか首を立てに振ることはなく、一度セントバーナードを飼うことを進言した時など、「おまえが、

ご飯を食べなくても良いと言うなら飼っても良い。」との返事が帰ってきた。これには、妙に納得して諦めた記憶がある。哺乳類の飼育許可を取り付けたのはミニウサギが最初で、ここからは五月雨式に哺乳類の飼育が開始された。時を同じくしてテレビでは、BBC提供による“野生の王国”が放送されており、毎回欠かすことなくおそらく口が半開き状態で見入っていた。漫画と言えば“ジャングル大帝”と“ぼくの動物園日記”であり、こうなるともう、将来は獣医師か動物園の飼育係の路線をまっしぐらということになる。

2 畜産試験場から家畜保健衛生所へ

獣医師免許の取得し、最初に就職したのは、関東の家畜生産地帯栃木県の畜産試験場であった。

ここで、和牛の肉質改良やら繁殖に係わることとなる。学生時代“家畜繁殖”の授業など真面目に受けていない身故、ここに来て、実習を含む繁殖学を真剣に取り組まざるをえなくなったが、これがかなり興味深いものであることに気づかされた。その当時まだポピュラーになれなかった受精胚移植(ET)の農家普及や博打的要素の強い種雄牛の選択、これらはなかなか刺激的であった。しかし、一方で試験場という所に所属している獣医師として、その頃猛威を振るっていたオーエスキー病対策やら散発していたニューカッスル病対策等家畜疾病予防対策の必要性にも直面していた。幸いにもその当時日本では、豚コレラの発生も全国規模での計画的ワクチネーション実施で殆ど見られなくなっており、ましてや口蹄疫や狂犬病等発生など考えられなかった。実体は一体どんな病気なのか? そんな時ふと思い出したのが、青年海外協力隊の存在であり、途上国と言われる国に行けばその現実に出会えるのかも知れないので機会があれば応募してみようと思うようになった。3年間試験場で餌やりやら牛舎の掃除やらの現場作業から受精胚移植、治療、農家への野外試験に携わった後、次なる所属は、家畜保健衛生所。ここでは、かなり農家と密接な係わりを構築して衛生指導や繁殖管理指導、家畜伝染病予防法に

<sup>†</sup> 連絡責任者: 蔵田 團果 (国際協力機構ザンビア家畜衛生・生産技術普及向上計画)

JICA Zambia Office P.O.Box 30027 Lusaka, 10101, Zambia

TEL + 260-211-254501 FAX + 260-211-254935 E-mail: madokakuma@yahoo.co.jp

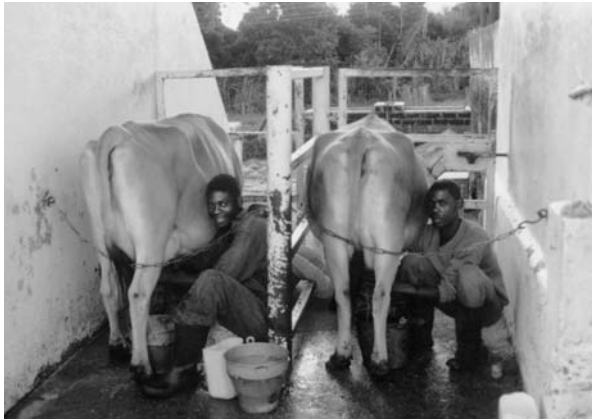


図1 マラウイ大農場での搾乳（牛はジャージー種）



図3 狂犬病が疑われる犬の首、これをラボまで届ける



図2 マラウイのVA (Veterinary Assistant) 達



図4 マラウイ農家への道。メイズ畑の間をぬって

基づく疾病検査に携わることとなった。ここでかなり役立ったのが、試験場で培った餌や飼養管理に関する知識と妊娠鑑定やETに関する知識であった。疾病対策の話プラスアルファの部分で農家の乗りがかなり違い農家指導の間、様々な話題に花が咲いたりした。このような農家との雑談からこちらが色々教えてもらうこともあったし、農家からの質問に調べ物をしなければならぬことも多々あった。

### 3 初めての海外（マラウイ）赴任

そんな日常にあってまたふと頭をかすめたのが、その当時日本で発生していないもののいつ侵入するかわからない伝染性疾病への興味と実践的に身につけた知識技術がどこまで活用できるのかというチャレンジ精神、ここで遂に青年海外協力隊への応募に踏み切る。紆余曲折の末、公務員の派遣法の適応を受けられるようになり、現職参加という立場で晴れてアフリカ、マラウイの地を踏むことになった。この国は、国土面積が日本の約1/3程そのうち1/3がアフリカ大地溝帯の終焉部に当たるマラウイ湖が占めるため水資源確保が容易なので農業で成り立っているような国で他にこれといった産業はない。

赴任地は風光明媚なチョロ。ここは、マラウイの第2の都市であるブランタイヤから南に約50km、植民地時代からお茶とタバコの大規模農園が点在する地域で、マラウイにおける主要な牛乳生産地域でもあった（図1）。マラウイは現在でも獣医師不足が続いているが、1994年当時、マラウイ国内の獣医師の数は協力隊員を含め20名弱、そのうちマラウイ人は確か4～5名、畜産農家に直接的に係わっているのは獣医師補（VA）と呼ばれる養成学校を出た人達で、私もこのチョロ獣医事務所長として10名程のVAを持つこととなった（図2）。ここで私を待っていた試練は、何と小動物診療。まだ見ぬ家畜疾病との出会いに胸躍らせて赴任して早々にやってきたのが、しょんぼりと俯き加減に犬を抱いて現れたマラウイヤン。見れば哀れ犬の前脚は開放骨折。「ドクター、うちの犬の脚治してもらえるかなあ？」とマラウイヤン。一瞬絶句。

「とりあえず治療はしてみるけど、これは治らないかもしれないよ。」と答えるもこの段階で何の治療方針なし。獣医事務所の棚を検索の結果、石膏包帯発見。犬の外科手術なんて学生時代基礎手術の実習をただけで、何の知識もないのにと悲鳴をあげながらも開放創の洗



図5 牛結核検査 (PPD 鳥型・牛型比較法)

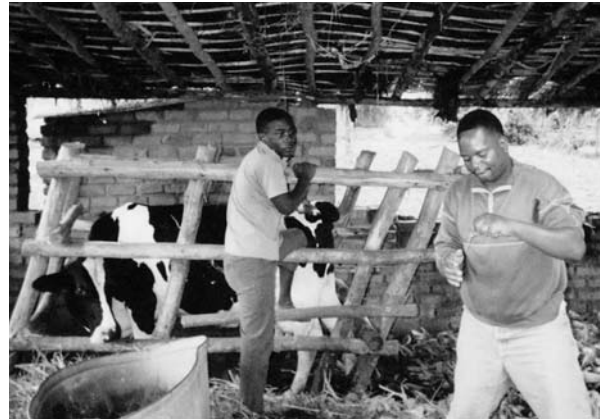


図6 マラウイローカルファームで人工受精

浄, 皮膚切開, 修復, 皮膚縫合, 板切れを副木にして上から石膏包帯で固め, 最後に抗生物質を注射. 治る見込みなしと思いつつも実費だけをいただくことにした. 予後不明である.

その後判明することになるが, このチョロ獣医事務所における仕事の約50%はワクチン接種を含む小動物診療. 30%がアドミニを含むVA達に対する薬品供給. 20%が家畜診療. とするわけで, 創傷縫合やら避妊やら去勢やらおまけに我が家は, 夕方以降事務所の電話回線が切り替えになる仕組みになっていたため, 夜中や明け方, 電話で呼び出され, 犬の帝王切開や馬の疝痛. 何代か前の先輩協力隊員が置いていってくれた外科の教科書と, 念のために持参した, 外科手術マニュアルのコピーに何度助けられたことか. ここでの2年間に会った疾病は, 狂犬病, アフリカ豚コレラ, ランピースキン. 狂犬病に関してはその疑いのある犬に噛まれた場合, すぐその犬の結果を病院に報告する必要があるため, その犬の頭が届けられるとただちにブランタイヤのラボまで届けなければならず (図3), 余程事務所に車の燃料費がある時以外はいつも犬の頭入りダンボールをバイクの荷台にくくりつけ運ぶのは私の役割であった (図4). 協力隊員=マンパワーそのものの日々. でも, このマラウイにあって家畜疾病対策や家畜増産に役立つものは何かと考えた末, 乳用牛を対象とした, 結核検査 (ツベルクリン検査, 図5) と妊娠鑑定を含む衛生管理指導をしようかと考えたが, たとえ結核検査で陽性となっても, その牛を淘汰できないのが現実であった. 世界で下から数えて何番目という最貧国で, 家畜を持てる人々は裕福と言われてはいるものの, 国から補償が出るわけでもないのに, 貴重な家畜を淘汰することはできないのである. 一方妊娠鑑定を含む衛生管理指導の方は, まあまあでその当時マラウイでは国家計画に基づいて人工授精が普及していたにも拘わらず, 空胎期間が2, 3年では, 乳量が期待できるわけではなく50%ホルスタインフリージア

ン種であっても日量5kgという信じがたい実態. 人工授精したら少なくとも5~6カ月で妊娠鑑定を実施して, もし空胎だった時は, よく牛の様子を観察するようにと農家に言うだけで, 「そうだったの, ジャあそうする.」との返事が返ってきていた (図6). その後空胎期間について確認していないので判らないが, この憎めない性格のマラウイヤン達の純粋さといひ加減さを考慮して空胎期間平均1.8年くらいになっていることを期待する. 結局口蹄疫には会うことなく帰国と相成った.

#### 4 スリナムでの活動

マラウイから帰国すると, 幸か不幸かボーっとしている間もなく家保では仕事は待っており, 日本の現実に引き戻される. 家伝法の通常業務, 繁殖と牛飼養管理指導, 放牧衛生指導, ET技術普及指導これらを黙々とこなす日々. これらはこれらで, 自分を生かしているのだとは思いつつも, 何か物足りない気持ちで3年が過ぎたある日, 協力隊機関紙であるJOCV Newsに国連ボランティア (UNV) 枠で獣医師の募集記事が. これは神の思し召しかと思える程のタイミング. 入庁以来色々面倒を見てくださった諸先輩方と何より公務員獣医師として一人前に育ててくださった畜産農家の方々に大変申し訳ないという思いを残しつつ退職し再び海外へ. 次なる赴任地は南米スリナム. 南米大陸における非ラテン国ガイアナ3国. この3カ国ガイアナ, フレンチギアナ, スリナムは, 其々旧英領, 現在も仏領, 旧蘭領. ラテンの乗りはなく, 近隣のカリブ諸国とも少々異なっている. スリナムの場合アフリカとアジアのミックスといった国, ギネスブックに国土面積に占める森林率世界一で記載されている国である. 少々マニアックになるが昔全日本サッカーチームの監督をしていたことがあるオフト氏はスリナム生まれのオランダ人である. この国は日本の半分弱の面積に人口47万人 (うち実際国内居住は30万人程) 後はスリナム国籍のまま旧宗主国オランダで働いてスリナ

ムに仕送りしていたりする。)日本の政令指定都市にもなれない人口。国土の殆どがジャングルなので、普通の人々が生活しているのは海岸線が主。さて、ここでの主な仕事はと言うと2000年にEU基準で建設されたと畜場の衛生管理システムの構築。ここで獣医公衆衛生に首を突っ込んでいくことになった。所属先は、何とスリナム大学に付属する農業リサーチセンター、農業省の獣医ラボではない。しかし、この農業リサーチセンターには獣医分野のラボスタッフは存在しないのでリサーチセンター長と農業省獣医ラボの話し合いの結果、スリナム川の河口にあって、雨季になると度々浸水していた農業省の獣医ラボを農業リサーチセンター内に移転することで、ラボスタッフもそのまま移転できることになった。国や組織が小さい利点で結構小回りがきく。この国の獣医師数は両手で数えられるくらいしかない。さて、このスリナムという国はカリコムというカリブ地域の共同体に所属している。EU基準で新しいと畜場を建設したのは、カリブの観光地向けの牛肉輸出が目的であった。OIEリストA疾病の発生がないことから、可能性は高い。首都パラマリボはフレンチギアナとガイアナ両国境を東西に結ぶ道路の中間地点に位置するので、物資は集まり易い、勿論家畜に関しても地方でと畜して肉にするより多少輸送コストをかけても首都まで運んで売った方が高収益となる。貿易港もパラマリボにしかない。まあこんなに小さい国なので当たり前の話。小さい国の利点は、統一管理が容易なこと。EUスタンダードのと畜場の設備はきちりしており、と畜検査のスタッフもちゃんと研修を受けてきている。ここで私がやらなければならないことは、定期的細菌検査と抗生物質残留検査。細菌検査は兎も角としても、抗生物質残留をどう調べるか。持つべきものは頼りになる友人、早速日本の食肉衛生検査所に所属する友人に連絡を取り抗生物質残留検査簡易法についての資料を送ってもらうことに、次なるは、標準細菌株の入手であるが、幸いアメリカは近いのでラボの申請と輸入許可さえ取り付ければ購入可能。ラボ移転から始めてここまでたどり着くのに約半年、それでも協力隊員時代と異なり何の後ろ盾もなくゼロからのスタートで何とかできたのは、配属先のボスにかなりの政治力があつたからで、私にとっては非常にラッキーであつたとしか言いようがない。折角抗生物質残留を手がけるならと、乳業会社に集められてくる生乳に対しても残留検査を実施することにした。獣医ラボのラボテクは大概の細菌検査、血液塗末標本からの臨床検査や糞便検査は可能だったので、一般的に依頼されてくる検査等は今まで同様彼らにお任せすることにして、私がここで他に実施したのが、再び牛結核病検査、丁度同時期アメリカのTufts Universityから調査に来ていた学生と共同での牛ブルセラ病検査(ローズベンガル法)、血液塗末

からの住血原虫検査、頻発していた犬のレプトスピラ症の血清学的検査や、3,000~5,000頭規模で肉用牛を飼養していた農場への定期検査等であつた。協力隊員同様マンパワー。しかし、ここでも無理難題は否応なく押し寄せ、実はスリナムと言う国は、アマゾン産の大型インコ類、ツーカン類の鳥類及び蛇やカエルの輸出国で、輸入先でニューカッスル病陰性やらオウム病クラミジア陰性やらの証明が必要となると輸出業者の泣きつく先は…ということ、これらオウムやらツーカンからの採血、鼻腔スメアー採取(鼻ほじり)、果ては蛇の病勢鑑定(ここで初めて蛇の肝臓はやはり細長いということを知ること)。お陰でここでの3年間は、なかなか楽しく過ぎていった。しかし、肝心のカリコム向けの牛肉輸出に関しては、輸出国と輸入国間政府同士での合意が得られれば可能ということで、政府間取り決めの中で必要項目をクリアできれば輸出することが可能ということ調べ、それを所属先のボスに伝え、とりあえず3年間で集めた基礎データを提出。そこまでの先どうなったのかは不明という誠に無責任な結果となつてしまつた。

## 5 小動物病院での勤務から再び海外(ザンビア)へ

日本という枠にとらわれず、獣医師として国際貢献していけたらという思いを抱きつつ、スリナムでの3年を終え、仕事の当てもなく帰国。子供の頃から我が家では、「働かざるもの食うべからず。」と言われていた手前上、何とか職を見つけなければならずどうしたものかと思案していたところ、拾う神は存在し、我が家の犬猫達がお世話になっていた、動物病院で働かせていただけることになった。そして、またしても新たな道に首を突っ込むことになった。今思ってもよくまあ小動物臨床ほぼ素人の獣医師をよくぞ使う気になっていただいたと、感謝する以外になく、ひたすら自分でもできることから、こなす日々。学生時代一番面倒だと思つていた、ペットの飼い主からの稟告取りから始まって、基礎検査、血液検査。今まで動物の保定と言えば牛やら豚が相手だったわけで、小型犬やら猫の保定の大変なこと。しかも、その飼い主の視線を感じつつ……様々な試練の連続、治療の成功や治療の甲斐なく去っていく動物達、日々一喜一憂。そんな中にあつてもやはり、途上国への思いは常に頭の何処かに存在していた。そして思いがけなくその機会に遭遇することになった。一般公募がかかることが極稀な職種故、ダメ元のJICA専門家登録であつたので、その公募を見ることは年に数回、ところが、このたまたま見た公募に、「ザンビア家畜衛生/業務調整」の字。直後には、募集要項を読んでいた。日本の援助で設立されたザンビア大学(UNZA)獣医学部とザンビア農業省(MACO)を連携させて家畜衛生・生産性



図7 ザンビアでのVAトレーニング風景（妊娠鑑定）

を向上させるというプロジェクトの専門家兼業務調整とのこと、またしても大学と農業省を繋ぐ仕事で、この行政の縦割りを超えてというのが結構曲者であることは日本の公務員時代やスリナムで経験済、それでもやはりアフリカでまた何かできるという希望の下とりあえず応募。実はこのプロジェクト、前任の専門家が志半ばにして逝去されており私はそれを引き継ぐ形だったので、最初のプロジェクト設計の段階はパス。即ち一番大変なところをスキップして実行段階から携わることになった。JICA 専門家1年生にとっては有難い状況からのスタートとなった。「家畜衛生・生産技術普及向上計画」、このプロジェクトには長い背景がある。日本及びJICAはUNZA 獣医学部設立から始まってその後も25年以上にわたり協力を続けてきた。その結果としてこの25年間でUNZA 獣医学部から284名の獣医師を輩出MACOに所属するザンビア人獣医師の数も150人となっている。この数は、まだ十分と言える数字ではないが、毎年確実に人員は増加している。獣医学部の講師陣も1名を除き全てザンビア人でカバーできるようになっており、国内の獣医師育成機関として立派に機能するようになった。そこで次なる目標は、UNZA 獣医学部内に滞っていた知識・技術をどのようにフィールドに下ろしていくかということで、そのためには、MACOとの協力体制を構築しつつ、双方からフィールドへアプローチしていく必要があるということになり、今回のプロジェクトが出来上がったというわけである。ザンビアも隊員時代のマラウイ同様、フィールドの最前線で直接農家に接しているのはVA達で、彼らの能力強化なくしては、家畜疾病対策やら生産性の向上なぞ望めない状況なのである。プロジェクトはまず、このVAの上司にあたる獣医師 Veterinary Officer (VO) に焦点をあてた、トレーナーの為のトレーニングとVAへの直接的トレーニングの2本立てのトレーニングを主体に構成されていた(図7)。私が赴任した際は、実にプロジェクトが始まってから10カ



図8 牛肺疫（検査法もワクチンも確実なものがないため終息困難な状況が続いていて、2回の検査結果陰性でもと畜時に肺病変が確認される）

月が経過しており前任の専門家の方が逝去されて後半年が過ぎていた。しかし、驚いたことにザンビア人カウンターパートによってプロジェクト自体は運営されていた。これも実は25年間の日本の協力の賜物で、プロジェクトに所属する直接的カウンターパート5人(3名がUNZA 2名がMACO)の内UNZAの3名は3名とも日本で学位を取得しており自分達の立場を非常に日本的に良く理解していて、強要されなくとも主体性を持って行動を起こすということを身に付けており、既にフィールドレベルのニーズアセスメントが終了し、どういった内容でトレーニングコースを設定するかまで終わっていた。しからは、私の仕事は、このトレーニングコースに使用するマニュアルの作成に係る事務処理とトレーニングコース開催に係る事務処理。ここでまず問題となって出てきたのが、マニュアル執筆報酬の設定。何せ大学の先生に書いてもらうわけでそれなりに設定する必要があるのだが、限られた予算の中故、拝み倒し作戦、なせばなるものである。破格の報酬で合意を得ることができたのである。次なるは、内容を判りやすく簡潔に書いてもらうこと、私の中では、家保時代によくお世話になっていた家畜衛生必携や病勢鑑定マニュアルなのだが、上がってきた原稿にはかなり高度な内容が含まれていた。これを、フィールドで応用できるようなマニュアルにスリム化してもらったり、図表や写真を取り入れてもらったりひたすらお願いすることが続いた末ようやく完成。私自身に殆ど専門性がないので、どのモジュールに関しても比較的公平に、私が読んでよく分からない内容は削除といった判断基準が成立していた。専門性がないとい

うのも時には便利なものだと一人満足していたりした。ちょっとした障害は色々あったものの、ここザンビアでのプロジェクトは、高い評価を得て終了することができそうで、ほっと一息ついているところである。

因みにここザンビアでもパイロットサーベイランスとして牛の結核検査とブルセラ病検査を実施した。人と動物の共通感染症の基本という意識と、ここでは国立公園のレイヨウ類で結核が散見されること、しかも野生動物と家畜が接触する機会が多いこと、ブルセラの疑いのある流産が発生することからであった。

## 6 さ い ご に

私が、赴任した3カ国どこに於いてでもそうであったが、これら家畜疾病に対する法整備がなされていないため、名目上は摘発淘汰とされていても、何の法的拘束がないので、なかなか淘汰までは行き着かないというのが現状であった。特に結核やブルセラ病などは、重要な疾病と知りつつも、牛肺炎・口蹄疫やタイレリア症のように表面上目に見える疾病ではないのでその対処方針に関しては後回しになってしまう(図8)。伝染性疾病の発生にしても、疾病発生から移動禁止、移動制限、封じ込めをしてわっと一斉に処理を進めていく日本の家畜保健衛生システムの凄さとは天と地程の差があり、何とかならないものかと思うことも多くある。確かに獣医師の数自体が圧倒的に異なるし、政府に所属する獣医師の知識技術レベルに差があったりする。日本のように島国で他国と直接国境を接していない国と陸続きで国境を接する国では対策のとり方が違うとは思ふ。また、貧困に起因する不法取引の問題も多々。しかし、何か方法があるのではないか、せめて人材の知識技術レベル統一や新たな育成、このあたりは日本が比較的得意とするところで、現にその良い例がザンビア大学獣医学部の人材である。私がいわゆる「雑獣医師」として日本を含む4カ国で過してみても感じることは、途上国における家畜疾病対策やら家畜増産に関して、一過的に機材や人材を投入して結果

を得ることは容易い、しかし、その状況を継続させるためには、やはりその国に根ざした人材を育て基本や基準はあるもののその国に適応した方法を模索してもらうことが肝心なのではないかと。途上国の可能性を引き出すのはその国自身だが、それを引き出すために何か手伝えること、自分が日本の日本という環境で諸先輩や農家の方々から可能性を引き出してもらって獣医師として一人前になれたように、途上国でその環境での可能性を引き出せるお手伝いができればと思う。自分に専門性があるに越したことはないそれは絶対に自分の強みになるから、しかし、専門性がないことも時には強みになることもある。途上国で何かできないかと考えている人がいるとしたら、専門がないから、世界には通用しないと思うのではなく、自分に降りかかってくることに自分なりに対応していけることも重要な要素であり自分が現在持っている知識・技術をどのように応用できるかといったことも思い出してもらいたい。マラウィのチチェワ語とここザンビアのニャンジャ語は共通語が多くあり、両方に共通して私の気に入っている言葉バゴノバゴノ、スワヒリ語で言えばポレポレ、ゆっくりゆっくり、そう言っていられないことも多いけど、気長に付き合っていけたらと思うこの頃である。

## 略 歴

1986年日本大学農獣医学部(現 生物資源学部)獣医学科卒業。1988年同大学大学院修士課程修了。1988年から2000年まで栃木県職員として、県畜産試験場、宇都宮家畜保健衛生所(現 県中央家畜保健衛生所)及び氏家家畜保健衛生所に勤務。和牛改良繁殖、家畜保健衛生行政に携わる、その間公務員派遣法の適応を受け、1994年から1996年まで青年海外協力隊員としてマラウィ共和国チロ獣医事務所にて獣医事務所長として活動。2000年から2003年まで国連ボランティア(UNV)としてスリナム共和国 スリナム大学付属農業研究所にて獣医師として、同国のと畜場衛生管理システム構築及び家畜疾病検査システム構築に関わる。2006年から2009年までJICAプロジェクト業務調整/家畜衛生専門家としてザンビア共和国「家畜衛生、生産技術普及向上計画」に携わる。